

21 章は福音書が一旦完成してから、後で補遺として付け加えられたというのが聖書学者の一致した意見です。それはイエスの死と復活で、すべてが終わったのではなく、復活させられたイエスの委託により、弟子たちに宣教の使命が継承され、新しい出発点に立った。そのことを示すために、書き加えられたと考えられているのです。

今日の聖書箇所は、復活させられたイエスが、三度目にガリラヤにおいて弟子たちに現れたと書き始めます。ガリラヤの漁師であるペトロたちが夜を徹して漁をしても何も獲れませんでした。夜明けの岸辺にイエスが立っていますが、弟子たちにはイエスであることが分かりません。しかしイエスの言葉に従って、弟子たちがもう一度網をおろすと大漁となりました。殆どのイエスの顕現物語では復活させられたイエスが現れる時、最初はイエスだと分からず、それが分かるのはイエスからの語りかけや何らかの働きかけによります。イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに「主だ」と言いました。この「主だ」という言葉には原始教会の信仰告白「イエスは主である」が反映していると思われます。また、「主だ」は「主がおられる」とも訳せます。イエスの愛しておられたあの弟子はこの大漁の奇跡の出来事を見て、「イエスが共に生きておられる」と気付いたのです。イエスの顕現物語は「イエスは死人の間にはおらず、生きている者と共にいる」を強調しています。また、弟子たちはイエスが復活されたことを宣べ伝える時、弟子たちとの食事における顕現物語やエマオでの顕現物語などに記されていますように、自分たちが復活させられたイエスと食事を共にしたことを重要な根拠として語りました。「死者の中から神により復活せられた」はイエスの復活を語る典型的な表現です。「復活する」と訳されているギリシア語の単語は元々「起こす／立ちあがる」という意味の一般的な動詞です。イエスの復活そのものを目撃した人は弟子を含めて一人もいません。聖書に記されているのはイエスの死と葬った墓が空であったこと、イエスは十字架で死んでしまったという経験と、復活させられたイエスが現れたこと、復活されたイエスが共に生きておられるという経験、だけです。ユダヤ教では死は眠りにつくことと表現されるため、そこから生に転じることは「(死の眠りから) 起こされる」と記されたのです。「起こす／立ちあがる」という言葉が、復活を客観的な出来事として記すためではなく、これら二つの経験をユダヤ教の表現と重ねてイメージし、受動態(神さまによる)で表現されているのです。イエスは確かに死んでおり、それと同時にイエスは今も共に生きているのです。